

12
二葉 小国 312

国語の本

文部省検定済教科書
新教育実践研究所編

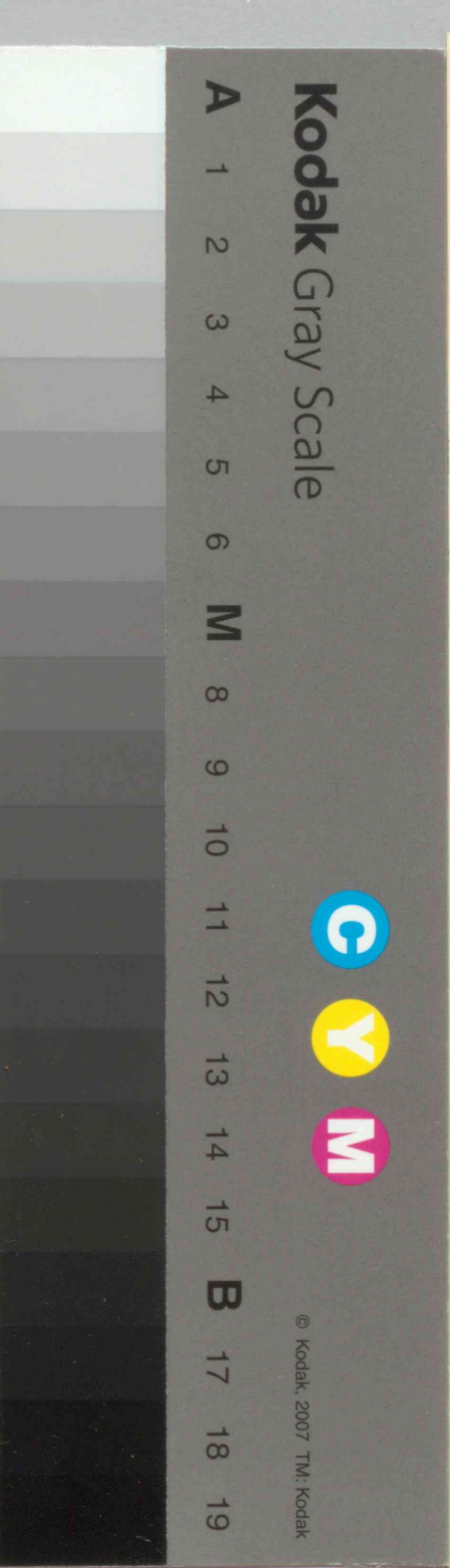
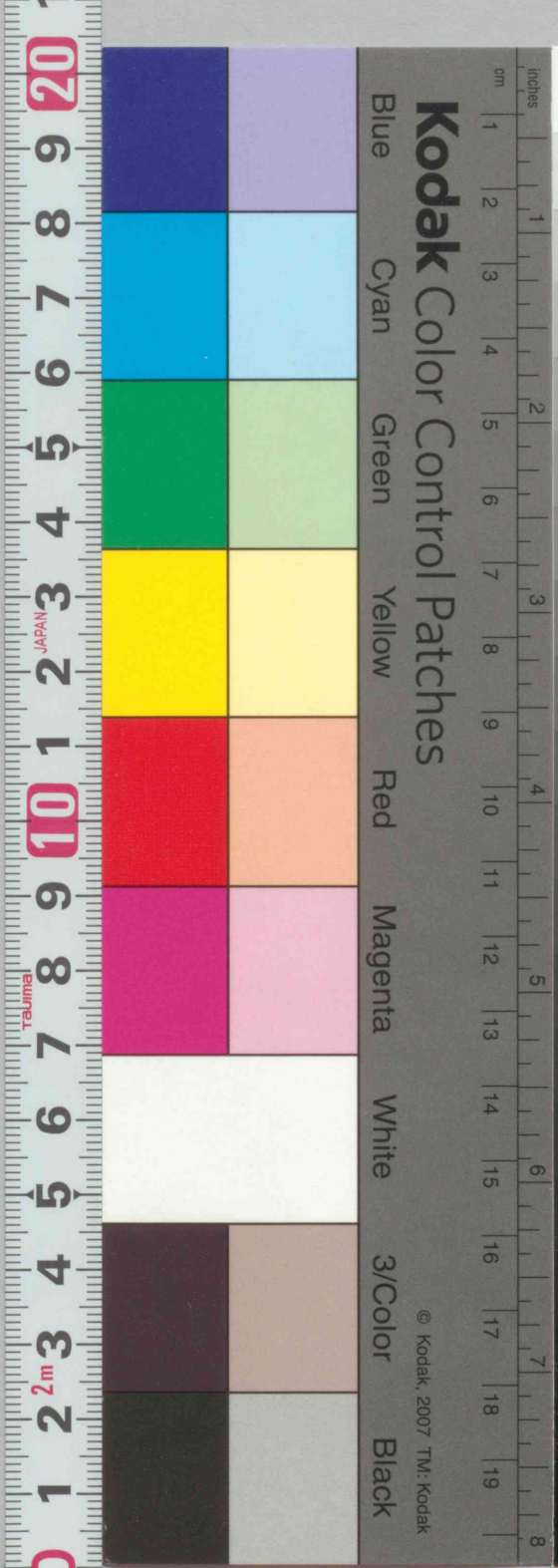


T1A7
1L0
2

三年下

6

教科
34
013



© Kodak, 2007 TM: Kodak

60340

教科書文庫

6
810
34-1950
01304 49919



広島大学図書

0130449919



教科書文庫

6

810

34-1950

0130449919

昭和二十五年八月十二日
文部省検定済
小学校国語科用

国語の本
六

第三学年
下



中央図書館

広島大学図書

0130449919





もくろく

一 山のぼり..... 4

二 キャッチボール..... 16

(一) キャッチボール..... 16

(二) タヤけ..... 18

(三) 月夜の川口..... 20

三 二十のとびら..... 22

(一) 二十のとびら..... 22

(二) ふしぎなひとこと..... 27

四 発表会..... 31

(一) 秋の七草..... 32

(二) ぼくのすきな発明王..... 36

五 学級新聞から..... 45

(一) 学校をきれいに..... 45

(二) あぶないところ..... 46

(三) しんせつ..... 47

(四) こわい犬..... 49

六 まさつ電気..... 50

(一) まさつ電気..... 52

(二) 雪と氷..... 58

七 冬の夜ばなし..... 67

(一) みかん..... 67

(二) シンドバットのぼうけん..... 82

八 雪国のおたより..... 92

九 どこかで春が..... 109

(一) もしも春がこなかったら..... 109

(二) 原っぱ..... 111

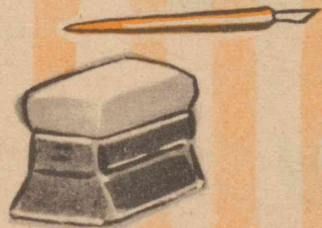
(三) どこかで春が..... 113

十 小鳥のうた声..... 115

おけいこの手びき..... 131

新しく出たおもなことば..... 134

かん字..... 136



一 山のぼり

空はききよう色に晴れています。
これからのぼる大山が、その空
にくっきりとそびえています。

「おうい、ぼくらは、これからの
ぼって行くよう。」

きよしさんが、大きな声で山に
よびかけました。

「ようし。いつでものぼっておい

でよう。」

と、山が返事をして、さしまねく

ような気がしま
した。

高等学校へ行っている、ちよ子さんのに
いさんと、よしおさんのにいさんにつれら
れて、あきらさんたち十人は、元気よくあ
るき出しました。

空は晴れたよ、あきらさん。





さあ、これから山にのぼる
のです。
「ぼくは、つよいんだから。」
と、つよしさんは、せなかの
リックサックをゆすりながら、
先頭に立ちました。



「ぼくの名も入れてください。」
と、よしおさんがいうと、
どの子もよい子だ、よし
おさん。
「ね、わたしたちの名も入れ

空気はすんでる、きよしさん。
秋草きれいに、しげるさん。
山はなかなか、たかしさん。
みんな元気で、つよしさん。
ちよ子さんのいさんが、みんなの名をとり入れてうたい
ました。



エンヤラコーラ、
ちよう上は近いぞ
エンヤラコーラ。
ちよ子さんのにいさんが、
おんどをとりました。みんな
が口をそろえてまねると、元
気が出てきました。声にあわ
せて、一足一足ふみしめなが
らのぼって行きました。

つよしさんが、だんだんお



道はなだらかでした。
ちよ子さんが、りんどうの花を見つけて、むねにさしまし
た。それをまねて、みんなは野ぎくの花や、おみなえしの花
をつんで、ぼうしにつけたり、むねにさしたりしました。

道がだんだん、けわしくなっ
てきました。

おしゃべりをしていた人た
ちも、だんだん、ことばすく
なくなってきました。

お山は高いぞ



しげるさんたちの声です。
 「おうい。」「おうい。」とよびあっているうちに、しげるさんたちの声は、しだいに遠くなりました。
 もずがないて、「つよしさんは、名まえもつよしだから、もっとがんばるんだよ。」と、はげまして



つよしさんたちは、先にのぼって行くしげるさんたちと、だんだんはなれていきました。
 「おうい、がんばれー！」
 つる子さんは、ちよ子さんのにいさんに、手をひいてもらいました。

くれてきました。
 よしおさんのにいさんが立ちどまって、リックサックを持ってやりました。つよしさんはうわぎをぬいで、あせをふきました。

くれました。

まっかなはぜの葉が風にゆれて、「つる子さん、もうあとすこしだから、元気をお出しなさい。」と、はげましてくれました。こんどは、こっちから声をかけました。



「おうい。すぐ行くよう。」
二組の声はだんだん近よって、つよしさんたちは、とうとうおいつきました。

やっと、ちよう上につ

きました。みんなは、思わず声をそろえて、「ばんざい、ばんざい。」とさけびました。

すみきったすずしい風を、ちよ子さんのにいさんは、「おいしい、おいしい。」と、なんども

大きくすいこみました。みんなもまねてすいました。

みんなそろって、見はらしだいにかけてあげました。

ながめがぱつとひらけて、目がさめるようでした。きいろ

いたんぼも、白い道も、お宮の森も、まがりくねった川も、あたたかい秋の日をあびて、大きなあぶら絵をひろげたように見えました。絵のじょうずなきよしさんは、持ってきたしゃせいちょうをひろげました。けれども、どこからかいてよいかわからないのでこまりました。



「指めがねで見るといいよ。」
と、よしおさんのにいさんが教えてくれました。

みんなは、指めがねでながめました。

「あっ、ぼくの指めがねは、バスの走るのが見えるよ。」

「わあ、てっきょうが見えるわ。」

「ぼくは、学校と役場が見える。」

「ぼくのうちはどこだろう。あっ、あった、あった。」

あきらさんは、遠くの山をながめました。山はしたしそうに、山のぼりはおもしろいだろう。」

と、話しかけているようでした。

二 キャッチボール

(一) キャッチボール

にいさんのなげるボール、
ぼくのミットにみごとにはいる。
よこなぐりにきたのは、ぎゃく
でうける。

高いボールはとびあがってとる。
ひくくきたのはかがんでとめる。

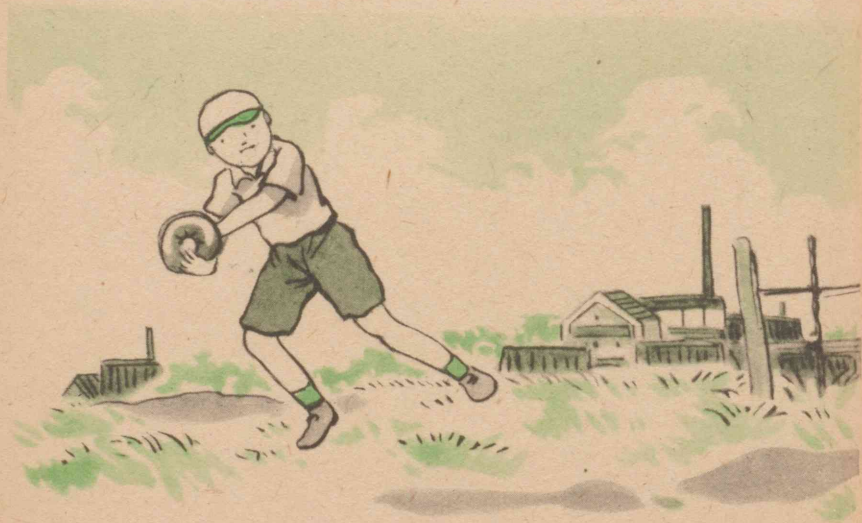
火のようなたまがみごとには
いった時の、

びしりとしびれる感じの気持
よさ。

夕日をせにして、
シャツ一まいで、

きょうもやるキャッチボール。

高いボールはとびあがってとる。
よこなぐりにきたのはぎゃくで
とる。



どんなつよいボールでも、
めったにそらさないぼくのミット。
アカシヤのえだが青い空をくぎって、
きょうもきいんとしたお天気だ。

(二) タやけ。

西の空がまっかなタやけだ。
むこうの山のふもとから、
小さい子どもの声が、ホー、ホー、ホーときこえる。
まるでタやけの空からきこえてくるようだ。

おにごっこでもしているのだ
ろう。

馬小屋の中では、馬が気持よ
さそうにはなをならし、
ポコ、ポコ、ポコとゆかをふ
みつけている。
馬の足音も山までひびいてい
くようだ。

山も、馬小屋も、家も、にわ
も、みんなタやけにそまって



まっかに見える。

(三) 月夜の川口

月夜の川口はあかるい。

波が光る。

岸の小ぶねが光る。

じょうき船が川のまん
中を通る。

ポン、ポン、ポン、

けむりのわをはいて行

くと、

小ぶねが、ギツシ、ギツ

シゆれる。

波が光りながらくだける。

じょうき船は長い光の

おをひいて行く。

ポン、ポン、ポン、

月夜の川をわけて、

じょうき船はすすむ。



三 二十のとびら

(一) 二十のとびら

ラジオの「二十のとびら」は、みなさんもきいているでしょう。

「さあ、こんどはむずかしい問題ですよ。いいですか。動物

——動物です。」

と、アナウンサーが問題を出します。

一 「人げんにかんけいのあるものですか。」

「あります。」

二 「なにかのしょうばいですか。」

「いいえ、しょうばいではありません。」

三 「人げんのからだの一部ですか。」

「そうです。」

四 「だれでも持っているものですか。」

「だれでも持っています。」

五 「ちよつと見てすぐわかるものですか。」

「そうですね。見えたり見えなかつたりします。」





「しらがではありませんが、毛にかんけいがあります。」

一二 「つむじです。」

「そうです。あたりました。」

ラジオをきいていると、あつてゐる人たちのしつもんが答に近くなるたびに、はくしゅがおこります。あまりけんどうはずれのしつもんを出すと、

- 六 「指にあるものでしょう。」
- 「いいえ、ちがいます。」
- 七 「かおにありますか。」
- 「かおにはありません。」
- 八 「のどにあるものでしょう。」
- 「いいえ、のどにもありません。」
- 九 「首より上にありますか。」
- 「そうです。首より上にあります。」
- 一〇 「頭にあるものですね。」
- 「そうです。」
- 一一 「しらがですか。」

どつとわらい声がおこります。きいていても気がせいってきます。二十のとびらをするには、ことばがつかわれます。あてる人たちは、まず出された問題を、あれかこれかと考えます。なにによって考えるかといえは、それはことばです。ラジオをきいているものも、ことばによってわかるのです。赤い花を見ると、私たちは、

「この花は赤い。」

「ああ、赤い花がある。」

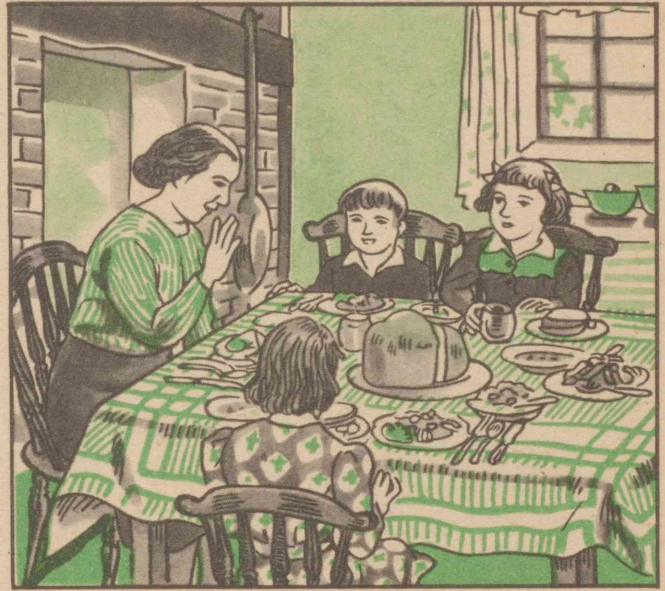
などといいますが、ことばがなければ、それをいうことはできません。

おなががすいて、なにか食べたいと思う時、その「なにか食べたい。」という気持をあらわすにも、ことばをつかいます。

空気や光や水などがなかったら、私たちは、一日も生きていくことができません。しかし、そのたいせつなことは、ふだんあまり気がつきません。ことばもそれとおなじように、ふだんは、それほどだいじなものと思われていませんが、これがなかったらどうでしょう。なに一つ、考えることも、いうことも、きくこともできません。ことばは、ほんとうにたいせつなものです。

(二) ふしぎなひとこと

みんながテーブルにつきました。ミミーという子どもの、



水をのむコップがからっぽで
した。

「かあさん、お水。」

と、ミミーが申しました。

かあさんはだまっています。

「かあさん、お水がほしい。」

と、またミミーが申しました。

お水をくれるかと思ったら
くれないで、かあさんは、つ

ぎのようなお話をはじめました。

「ある所に、大きな、大きな、びっくりするほど大きなほらあ

ながありました。その中には、
いろいろさまざまないいもの
がはいっていました。そして、
そのたからものことをきき
つたえた人たちが、どうかし
てそのほらあなをあけてやら
うと思ひまして、ありとあら
ゆることをためしてみました。
てつをつちをうちこむものも
あれば、あなをほってはいろ
うとしたものもあります。わ



いわいさわいでつかれてしまったものもあります。しかし、その大きなほらあなはしまったきりで、どうしてもあきませんでした。そこへ、ある日のこと、どこかのおじさんがまいりまして、たったひとことしずかにいいましたら、大きなほらあなが、すぐにあいてしまいました。たったひとこと、ふしぎなひとことを……」。

これをきいていたミミィは、いつもかあさんのしてくださるお話には、ためになる教えがはいつているものですから、その時も、

「かあさん、それは『どうぞ』じゃないの。」
と、いつて、すぐにあてました。

四 発表会

あきらさんたちの組では、あすのひるから、発表会をすることになっていきます。出る人は、つる子さんと、たかしさんと、しげるさんの三人です。

つる子さんののは、「秋の七草」というかんさつ発表で、山でつんできたのを持ってきます。たかしさんは、「ぼくのすきな発明王」という読書のかんそう発表で、本を三さつと、エジソンのしゃしんを持ってきます。しげるさんののは、「紙はどうしてできるか」という見学のほうこくで、紙になるものや絵を持って

きて見せます。

発表がすむと、また、いつものように、しつもんや、かん
そうの話しあいがありますから、みんなたのしみにして待っ
ています。

(一) 秋の七草



青くすみきった秋の空の下に、
いろいろな草の花がさきみだれて
います。

その中で、キキヨウ、ハギ、ス
スキ、オミナエシ、クズ、フジバ

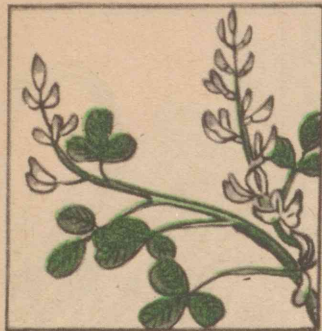
カマ、ナデシコの七つを、秋の七草といいます。

むかしの歌に、

はぎの花 おばな くずばな なでしこの花

おみなえし また ふじばかま あさがおの花

というのがあります。アサガオの花というのは、キキヨウの
ことだそうです。



(1) ハギ

ハギは、まるい葉で、葉の間から、もも
いろの小さな花が見えます。ハギが風に
ふかれています、とてもきれいです。



(2) オバナ

オバナは、すくすくした、ほを出して
います。葉はほそ長くて、さわると、手が
切れそうです。



(3) クズ

花はうすむらさきで、大きな葉が三つづ
つ、ついていきます。このクズの根から、
くずこをとります。



(4) ナデシコ

葉はほそ長くて、花の色はうす赤です。
花びらの先はいくつにもわかれていきます。



(5) オミナエシ

きいろい花が、いくつも集まってさいて
います。葉は、長くなっています。



(6) フジバカマ

花の色はうすむらさきで、葉はほそ長い
かっこうです。



(7) キキヨウ

花の色はむらさきで、長い葉がついてい
ます。花びらは五つにわかれて、とても
きれいです。

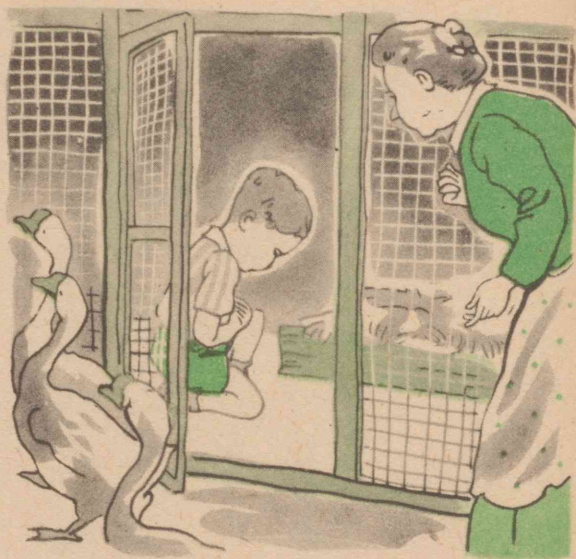
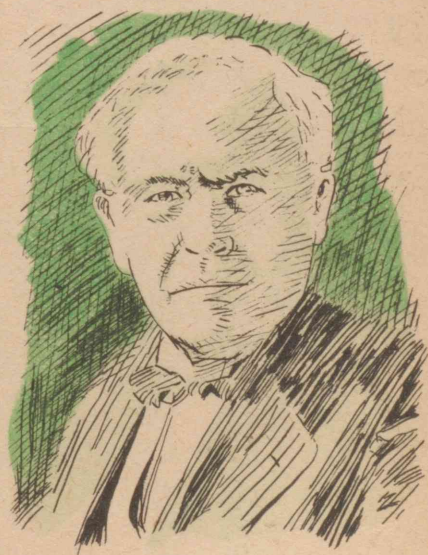
秋の七草は、みんなきれいな花ばかりです。

(二) ぼくのすきな発明王

世界の発明王といわれる、アメリカのトマス・エジソンは、昭和六年の十月に、八十五さいでなくなりましたが、ほんとおもしろい人だと思います。

ぼくは、エジソンのお話を読むたびに、子どものころのちゃめぼうであったことが、ゆかいてたまりません。読めば読むほど、エジソンがすきになります。

がちよう小屋の中で、がちようのたまごをあたたためて、お



にはまねができません。ふつうの人とは、たしかにかわっています。

家がびんぼうなので、十二さいの時には、なにか自分でお

かあさんや、となりのおばさんをびっくりさせ、また、小学校へはいつてからも、考えごとばかりしているので、学校のべんきようができなくなり、とうとう半年で学校をやめて、おかあさんから学問をならいました。

そういうことは、とてもぼくら

金をもうけて、すきな本を買おうと思い、しんぶんの売子になりたいたと、むりにおかあさんにたのみました。おかあさんも、そのいっしょうけんめいな心に感心して、目いっぱいなみだをためながらも、ゆるしてやりました。

それから、グラント・トラックというつどうの列車の中で、

「ええ、しんぶん、しんぶん、ただ今発行のしんぶ

ん。」

とって売りあるいたので、なかなかはんじょうしました。

家に帰るのは、いつも夜の九時ごろになりましたが、つかれをなおすひまもなく、夜おそくまで勉強しました。はたらいたお金は、むだづかいをしないで、みんなためておきました。

ある日、お金を持って、

「わかった、わかった。うまい、うまい。」



とさけびながらかけ出して、いんさつきと、インクと、紙を買ってきて、グラント・トラック・ウィークリー・ヘラルドという、おそろしく長い名まえの小さなしんぶんを発行しました。

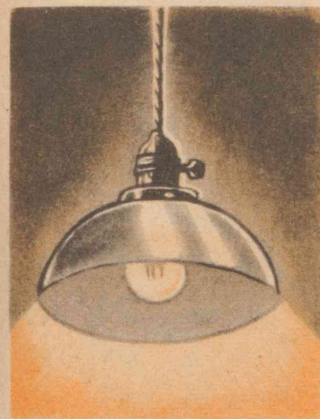
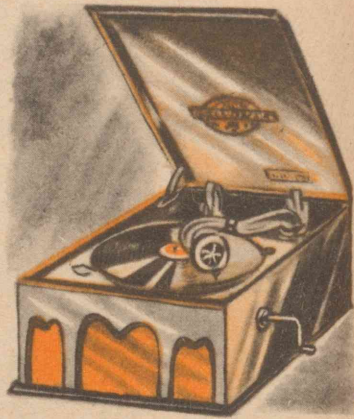
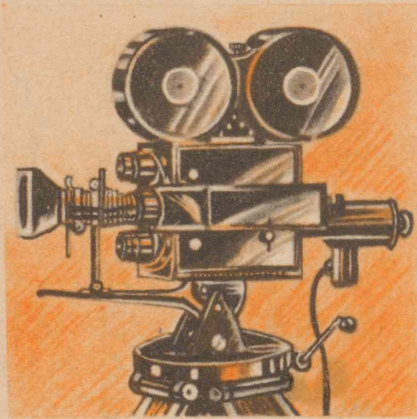
それがまた、すばらしくよくできていて、おもしろかったので、大へんなひょうばんになりました。とぶように売れたので、ずいぶんたくさんのお金をもうけて、おかあさんをよろこばせました。

その間もけんきゆうをやめませんでした。

ある時は、列車の中で、かがくのじっけんをしてしっばいし、火事を出そうとして、車しようさんに、ほったをびしゃ

りとやられたことがあります。また十五さいの時、しんしのわる口をいったとまちがえられて、川の中へざぶんとなげこまれたこともあります。また、ふる本を山のように買いこんで、夜道を通る時、どろぼうとまちがえられて、ピストルをドンとうたれたこともあります。あぶない目にもあいましたが、さいわい、なんべんも





いのちはたすかりました。

そんな時は、エジソンも、すっかり考えこみました。人の一生はわからないものだ。いついのちがなくなるかわからない。いのちのあるかぎりけんきゆうしようどけっしんし、夜もろくろくねむらないでせいを出し、いよいよ、ほんどうの発明ができるようになりました。ふつうの人なら、そんなこ

とに出あった時は、なんでも自分のすきなことをしようと思いやすいのに、発明王となる人だけあって、考えがちがっています。

しかし、もしエジソンが、そんな

つまらないことのためにたおれたら、電とうや、ちくおんきや、かつどうしゃしんきなどのべんりなものができないうで、世界の人々は、どんなに不自由をしていることでしょう。

今から七八十年もむかしに、そういうりっぱな発明ができていたので、ぼくらは、この文明の世に生まれているのだから、それよりも、もっとりっぱな発明をしなければなりません。

ぼくは、いつもエジソンの本を読んで、「時計を見るな。」と書いてあるところにくると、きまりがわるくなります。なぜかという、ぼくは、勉強をしていながら時計が気になって、よく時計を見たり、時々大あくびをしたりするからです。

こんなことでは、まだまだ、りっぱな発明はできないと、エジソンを思いだして、自分のやり出したことをしてしまふまでは、ほかのことに心をとられまいとけっしんしました。



五 学級新聞から

(一) 学校をきれいに

日曜日に、用事があったので、学校へ行ったら、こづかいのばあやさんが、たったひとりでごみばこのまわりをそうじしていました。「ばあやさん、たいへんですね。お手つだいしてあげましょうか。」



といたら、

「いいんですよ。あそんでいらっしやい。」

と、わらいながらいいました。

ばあさんは、私たちが帰ったあとや、お休みの日には、いつでも、よごれているところのおそうじをしてくださるそうです。とてもいいばあさんです。私たちも、学校をよごさないように、よく気をつけましょう。

(二) あぶないところ

ゆたかばしの上であそんでいた小さな子どもが、かけ出したらはずみにふみはずして、今にも落ちそうになりました。ちやうどそばを通りかかったおとなの人が、それをうまくつかまえて、助けたそうです。これはおかあさんからきいた話ですが、あぶないことでした。雨あがりで、水がたくさんになって、流れもきゆうでしたから、落ちたらそれこそ死んでしまいます。

あのはしの上では、ローラースケートなどをして、よくあそんでいます。あぶないし、通る人のじやまにもなりますから、あんなところであそぶのはやめましょう。

(三) しんせつ

一時間目の勉強がすんで、ろうかがあるいていたら、どこ

かのおじさんが、そこに立って
いた小さな女の子に、

「五年生の二組の教室はどこで
すか。」

ときいていました。

その子は、はっきりした声で、

「五年生の二組は二かいですか
ら、つれて行ってあげましょ
う。」

といって、すぐあんないして行きました。

私がいじばんを見ていたら、さっきの子がにこにこしな
がらおりてきました。

「あなた、二年生でしょう。だあれ。」

ときくと、

「ええ、あんどりのぶこ。」

といって、わらいながら教室の方へあるいて行きました。

かしこそうな二年生でした。私たちも、人にはこんなふう
にしんせつにしてあげましょう。

(四) こわい犬

一本まつのそばの家には、こわい犬がいます。私は、けさ
学校へくる時、ほえられてこまりました。





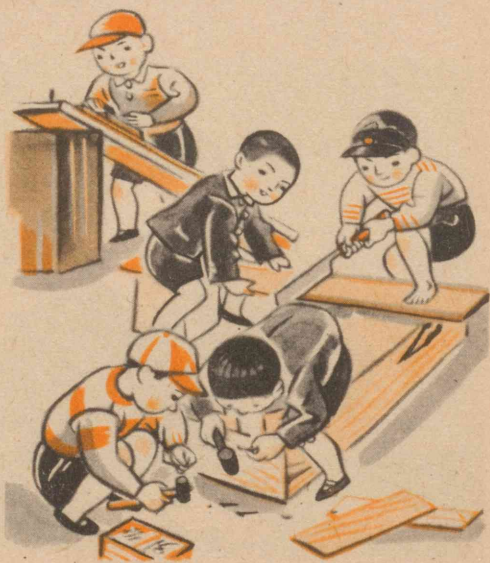
(五) とびばこ

「ワン、ワン、ウー、ウー。」と
かみつきそうにほえます。つな
いでないので、どこまでもおっ
かけてきます。かみつかれたら
たいへんです。
きょうけんの多いことが新聞
にも出ていました。一本まつの
方へ帰る人たちは、よくちゅう
いしてください。

きのう、学級日記をつけてか
ら、ひとりで帰ろうとしたら、
六年生が五六人で、とびばこを
なおしていました。みんないっ
しょうけんめいでした。

私が、「さようなら。」といった
ら、こちらをむいて、「さような
ら。あしたから、とびばこがつかえるよ。」
と、みんなにこにこしながらいきました。

けさきてみると、きれいなおっていました。
いい六年生ですね。とびばこをたいせつにつかきましょう。



六 まさつ電気

(一) まさつ電気

年がじょうを書いていゝる時でした。あきらさんが、えんぴつの先を頭でこすってから、字を書こうとすると、はがきの上の小さい紙きれが、えんぴつの先にすいつきました。



「へんだなあ、じしゃくみたいだ。」と行って、もう一度やってみました。やっぱりすいつきます。

今度は、けしゴムでやってみました。そのままではずいつきませんが、頭の毛でよくこすると、小さな紙きれがとびあがつてきます。「これはおもしろい。」と行って、今度は、ふて入れの中の小刀や、ペンじくでしてみました。小刀はすいつきませんが、ペンじくはとてもよくすいつきます。「ものによつて、すいつけるものと、すいつけないものがある。」ということがわかりました。

そこへおじさんがきたので、

「おじさん、おもしろいことを見つけたよ。ほら、見てごらん。」

といいました。

「なるほど、それはおもしろいことだ。まさつ電気だね。」

「まさつ電気って、なあに。」

「ものどものとをこすりあわせると、電気がおこるのだ。」

すいつくのは、その電気のカだ。」

と、おじさんが教えてくれました。

また、

「よく火でかわかすと、電気がにげられなくなるから、よけいすいつくようになるよ。見ていてごらん。」

と、いって、まんねんひつや、くしなどを火でかわかしてから、ようふくでこすったり、頭でこすったりすると、紙きれが、

一センチもとびあがってくるようになりました。そうして、すいついたと思うとはなれ、はなれたかと思うとまたすいつきます。

「おもしろいなあ。ぼくはあすの発表の時間に、このじっけんをすることにしよう。」

と、あきらさんがいいました。

おじさんは、

「それでは、もっとおもしろいじっけんを教えてあげよう。」



といって、新聞紙を長さ五十センチ、はば五センチぐらいに切って、よく火でかわかしました。

それを二まい、左の手の指の間にはさみ、右の手の指の間で、すばやく二三回こすると、二まいの新聞紙が、さつと左右にひらきました。

「さあ、ひらいたろう。よく見てごらん。」

といって、今度は、ひらいた紙の間へ右手を入れると、ふしぎにも紙は手のそばへよってきて、すつととじます。手をおぎけると、またひらきます。

「おもしろい、おもしろい。」
と、あきらさんは手をたたいてよろこびました。



「さあ、このとおり——の字だ。」

つぎに、半紙を二まい持ってきて、よく火でかわかし、その中の一まいに、たばこのこなをまきました。もう一まいの紙には、ちやわんのよこでこすりながら、「正月」という字を書きました。それを、まえの紙の上においてから、はなしてみると、「正月」という字があらわれました。電気の方で書いた、たばこのこな

と、どくいそうにおじさんがいいました。そのようすがあまりこっけいだったので、あきらさんはくすくすわらい出しました。

(二) 雪と氷

きのうからふった雪が、二十センチもつもりました。あきらさんがにわで、雪だるまや雪うさぎなどをつくっていると、そこへ、なかよしのよしおさんがたずねてきました。よしおさん



は、ガラスのくだのようなものを持っていました。

「それ、なんというもの。」

「これは、しけんかんといいものだよ。これでアイスクーキをつくってあそぼうよ。」

と、よしおさんがいいました。あきらさんは夏のころ、よくアイスクーキを食べたことがあるので、

「ほんとう、うまくてきるかしら。」
とききました。

「なんでもないよ。せんめんきに、雪としおを入れてまぜあわせて、その中へ水のはいったしけんかんをさしこむのだ。そうすると、中の水がこおって、すぐアイスクーキになる

んだよ。」

といました。あきらさんは、この話をきくと、すぐつくつてみたくなりました。

「早くつくってみよう。ぼく、しおとはしを持ってくるよ。」

ここに、せんめんきがあるからね——」。

といいながら、あきらさんは台所の方へかけて行きました。

間もなく、しおとはしの用意ができました。

あきらさんは、せんめんきに雪を半分ほど入れ、それにしおをふりかけて、かきまわしました。

すると雪はきゆうにかたまって、こつこつしてきました。

あきらさんは、しけんかんに水を入れて、その雪の中にさし

こもうとしましたが、かたくて

はいりません。指であなをあけて

さしこみました。つめたくて

指の先がひりひりします。

「あ、つめたい、つめたい。」

とさげびました。すると、よし

おさんが、

「しおを入れると、ふつうの雪

よりも、うんとつめたくなる

そうだよ。」

といました。



「しおを入れると、雪がつめたくなくなるなんて、ふしぎなものだなあ。どれくらいつめたくなくなっているのだろう。かんだん

計でしらべてみよう。」と、あきらさんは考えました。

おとうさんのへやから、かんだん計を持ってきて、せんめんきの氷の中にさしこんでみました。かんだん計はぐんぐんさがります。れい度のしるしのところから、まだ十二度もさがりました。



「これはなん度だろう。」と、考えていると、よしおさんがよこからのぞきこんで、

「これは、れいか十二度だよ。ふつうの雪は、れい度でとまるから、それより十二度もひくいわけだね。」
といました。

あきらさんは、れいか十なん度という、まんしゅうやシベリヤの話を思い出して、「まんしゅうやシベリヤの冬は、いつもこんなにつめたいのだなあ。」と思いました。

「もう、できたかな。」
といいながら、よしおさんがしけんかんをぬいてみると、その方がすこし白くなっています。

「もう少し、しおを入れてみよう。」

といって、また、せんめんきの中に、しおをふりかけました。ところが、どうしたとか、雪はかえって、とけはじめました。

「へんだなあ。」と思いながら、あきらさんは、もう一度、かんたん計を、その中へさしこみました。

すると、かんたん計はぐんぐんさがって、れいか十八度にもなりました。せんめんきの外がわは、白くこおって、つるつるしています。前よりもつめたくなっただけでしよう。「雪にしおをたくさん入れるほど、おんどはさがってくるのだな。」と思いました。しけんかんをあげてみると、もうすっかりこおっていました。



よしおさんは、しけんかんを手で少しあたためてから、はしをひっぱりました。すぼりと、まっ白でおいしそうなアイスケーキが出てきました。

「あ、できた、できた。」

と、あきらさんがいいました。

「さとうを入れたら、おいしいだろうね。」

「さとうがないから、かわりにみかんのしるを入れようじゃないか。」

「そうだ、そうだ。」



(一) みかん

ある所に、小さなまじしい村がありました。村の出はずれに、みすばらしい家がありました。母と子どもと、ふたりで住んでいました。父は早くなくなりました。冬の寒いはんのことです。子ども

七 冬の夜ばなし

ふたりは、こんなことを話しあいながら食べました。間もなく、みかんのしるを入れた、きいろいアイスクリームもできました。とてもおいしそうです。おもしろくなったあきらさんは、おかあさんからみかんをもらってきて、「さあ、今度はれいとうみかんをつくらうよ。」といって、みかんをそのままめんきの中へ入れてしまいました。

「まあ、おいしそうなごちそうですね。あまり食べすぎるとおなかをこわしますよ。」

と、おかあさんがいいました。

もの一ろうは本を読み、母はふるいきものをつくらっていました。

「どん、どん、どん。」

かるく戸をたたくものがあります。母は立って行って、戸を少しあけました。

雪が、ちらちらふり出していました。その中に、じゅんれいすがたのおばあさんが、しょんぼり立っていました。

「道にまよってしまいました。今ばん、おなさけにとめてくださいませんか。」

「まあ、それは、どうぞ。」

いいかけて、母はこまりました。たいへんびんぼうで、ふとんも、食べるものも、じゅうぶんはないのです。

「ただひとばん、家の中に入れてくださいますれば、それでけっこうでございます。」

と、じゅんれいのおばあさんはいいました。

「それでは、なんにもありませんけれど、どうぞ。」

おばあさんは、ひどくつかれているようでした。寒さにこごえているようでした。おなかもすいているようでした。寒さにころに火をたいて、あたらせました。いもがゆをこしらえて





食べさせました。一ろうのふとんをしいて、そこにねかすことにしました。

「ありがたいことです。ありがたいことです。」

と、おばあさんはいちいちお礼をいいました。

そのうちに、おばあさんは、にわかにかおをしかめ、からだ

をねじまげて、くるしみ出しました。ひどくくるしそうです。

母と一ろうは、まごつきました。どうしてよいかわかりま

せん。家にくすりはないし、いしゃは遠い町にしかいません。

「いいえ、なんにもいりませんよ。」

と、おばあさんはいいました。

「ただ、みかんがあれば、みかんを一ついただきますれば、すぐになおってしまいますけれど。」

「みかんですって。」

「はい、みかんを一つくださいませ。」

母と一ろうは、かおを見あわせました。もうみかんなんて、どこにもなくなっていません。みかんを売っている店なんか、村にはありません。おばあさんはくるしがっています。

「こまったねえ。」

「でも、どこかに、一つぐらいのこっているかもしれないよ。ぼく、さがしてこよう。」

と、一ろうはいいました。

そして、したくをして、ちようちんをつけて出かけて行きました。雪がちらちらふっていました。

一ろうは、家の横のみかんの木の所へ行ってみました。やはり、一つものこっていませんでした。



村には、みかんの木がいくつもありました。一ろうは、その一けんに行って、

「みかんを一つください。」

とたのみました。

「みかんだって。」

と、その家の人は答えました。

「みかんは、もう、とっくに売ってしまったし、一つものこっていないよ。」

一ろうは、ほかの家に行ってみました。

「なに、みかんだって。もう、とっくに売ってしまったし、一つものこっていないよ。」

どこに行っても同じことでした。まずしい村なので、みな買いにきた人に売ってしまい、一つ二つのこっていたのも、子どもたちが食べてしまったのです。

一ろうはがっかりして、帰ってきました。おばあさんは、ひどくくるしんでいました。せつなそうに、みかんをほしがっていました。

「よし、町まで行って買ってこよう。」
と、一ろうはいいました。

町までは、半里ほどあります。さびしい道です。森の中を通りぬけねばなりません。谷川の上の、高い橋をわたらねばなりません。そして、雪のふる夜です。

「だいじょうぶかい。」

と、母は心配そうにたずねました。

「うん。行ってくるよ。」

マントをきてずきんをかぶり、わらじをはき、ちょうちんに火をつけて出かけました。

おばあさんを助けたい一心です。走るようにして行きま

した。夜道のおそろしさも、雪のつめたさも、むりやりにおし通しました。そして、一ろうが町からもどってきた時には、





にっこりしていいました。

「ありがとうございます。のこった一つは、あとでお礼に

おばあさんは、一そうくるしがつています。

「さあ、みかんがきましたよ。と、母はいいました。

「お金がいくらもなかったものですから、二つしか買えませんでしたけれど。」

おばあさんは、みかんを一つ、うれしそうに食べました。そして、

さしあげます。」

そして、その一つのみかんを、ふどころにしまって、そのまま、すやすやねむってしまった。

よく朝、母は早く目をさしました。じゅんれいのおばあさんに、ふとんをたいていきせてしまったので、一ろうといっしよにうすいふとんを一まいきただけなので、たいへん寒かったです。

見ると、びっくりしました。おばあさんがいないのです。

一ろうもおき上りました。おばあさんは、どこにもいませんでした。戸はしめきってありますし、かぎもかかっています。外に出て行ったはずはありません。しかし、家の中には



いません。ふとんの中で、きえてしまったのでしょうか。まるで、ゆめのようでした。母も、一ろうも、ぼんやりしてしまいました。

すると、おもてから、村の人が一ろうをよびました。

「おまえは、よくばりだな。ゆべはみかんを一つください」といって、おれの所にもらいにきたが、自分の所のは、どうしたのだ。はははは」



さされた方を見ると、おもてのみかんの木の、いちばん高いえだに、みかんが一つなっていて、朝日にきいろく美しく光っています。

一ろうは、あっけにとられました。母も出てきて、びっくりしました。はずかしくなりました。はしごをかけて、そのみかんをもぎとり、草の中になげすてました。

ところが、そのよく日の朝、また、ほかの村人が、おもてか

ら一ろうをよびました。

「おまえは、よくばりだな。おとといのばんはみかんを一つ
くださいといって、おれの所にもらいにきたが、自分の所
のは、どうしたのだ。はははは。」

おもてのみかんの木に、また、みかんが一つなって、朝日
に美しく光っていました。一ろうと母とは、あっけにとられ
ました。そして、はじめて、

「のこった一つは、お礼にさしあげます。」

といった、じゅんれいのおばあさんのことばを思いだしました。
それから、一ろうの所のみかんの木には、美しいみかんが
一つ、いくらとつても、毎朝なっているのです。

村の人たちも、話を聞
いておどろきました。ひよ
うばんになりました。遠
くから見にくる人もあり
ました。高い金で買いに
くる人もありました。た
いへんおいしいみかんで
す。



それは、ずっとむかしの話です。そのみかんの木が、どう
なったかは、今でもわかりません。今では、この地方には、

たいていの家のそばに、みかんの木がありまして、みかんをとる時には、いちばん高いえだに、かならず、一つはのこしておくことになっています。

(二) シンドバットのぼうけん

みなさん、私はシンドバットと申します。バクダットのみやこの商人ですが、船に乗って、いろいろな所へあきないに行き、いく度も、ふしぎな目に会いました。

ある時、私たち商人を乗せた船が、航海をつづけていますと、まるで天国のように美しい一つの島へつきました。あまり美しい島なので、私たちはその島へあがってみました。



みんなで火をたいて、りょうりをこしらえ、にぎやかにごちそうを食べてあそびました。すると、どうでしょう。そのうちに、島がゆらり、ゆらりと、動き出したではありませんか。同時に、船長さんのさけびが、ふなべりの方から聞こえてきました。

「たいへんだ。たいへんだ。早く船へ乗るんだ。早くしないと、いのちがないぞ。」

おどろいたことに、島だと思ったのは、大きな魚のせなか

だったのです。大きな魚が、海の中にかんだまま、じっとしている間に、すながたまったり、草木がはえたりして、島のようになっていたのでした。それが、たき火のあつさにおどろいて、そろそろ動き出したというわけです。みんなは、いちからがら、船へにげこみました。運わるく、にげおくれたものは、魚の島が水の中へしずんだので、うずまきにまきこまれてしまいました。



私もそのひとりだったのですが、うまいぐあいに、おけが一つういていたので、それにはいあがり、波間にうかぶことができませんでした。けれども、船では、もうみんなおぼれたものとあきらめて、ほをあげて行ってしまいました。私はたったひとり、おけから二本の足を出して、かいのように水をジャブジャブかきながら、心ぼそい航海をつづけていました。そのうちに、日がくれて、おそろしい夜がきました。夜があけてみ

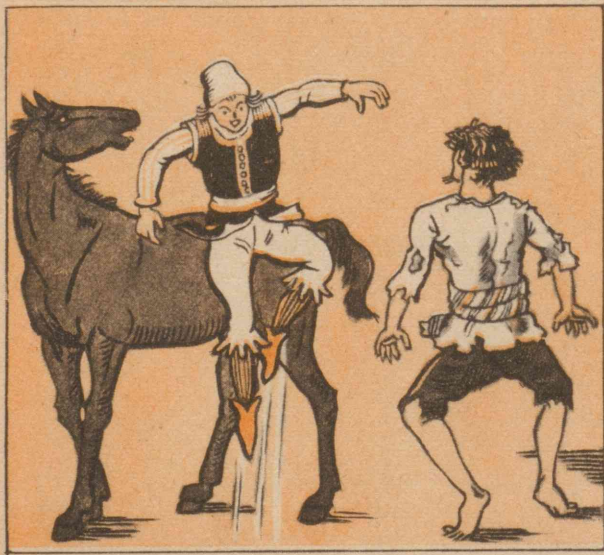
ると、私はまた、べつな島についていました。まあ、なんとなくうれしかったことでしょう。やっこのことで、高い岸の上へよじのぼりましたが、そのまま死んだ人のように、ぐったりねこんでしまいました。



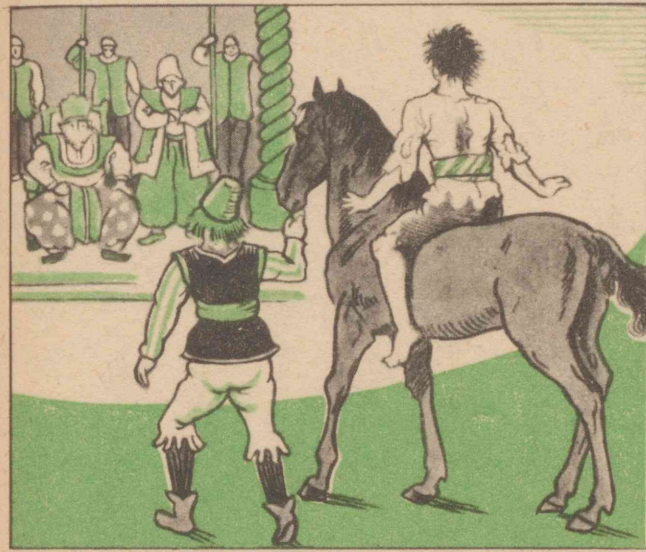
目がさめてみると、手足はいたむし、おなかはすくし、とてもあるくことができません。やっど、ひぎではいずって行きますと、よいあんばいに、くだものがたくさんなっているし、いずみもありましたので、それで元

気をつけることができました。

そのうちに、ある日のこと、私は海岸で、一ぴきのめ馬を見つめました。おや、と思うと、そのめ馬が大声でいななき、とたん、ひとりの男がとび出してきたのです。男も私を見て、おどろいたようでした。おたがいに話しあってみると、この男は、この島の王さまのべつとうですが、毎月、月夜のころになると、馬をおとりにして、海馬



をつかまえて王さまにさしあげるのだということでした。男は私の身の上をあわれみに思い、馬に乗せて、王さまの所へつ



れて行ってくれました。王さまも私の話を聞くと、いろいろしんせつにしてくれた上に、私をそのみなどの役人にしてくれました。私は毎日ちようめんを持って、はと場へ出かけ、出入する船や荷物をしらべていました。ところが、ある日のこと、大ぜいの商人を乗せた船が一そ

はいってきました。その船の荷物をしらべていると、その中に私の品物があつたのです。

へんだと思つて、船長にあつてたずねてみると、それはあの魚のせなかの島でわかれた船の船長でした。しかし、むこうでは私に気がつかないの

で、その荷物の主はだれかたずねると、
「これはシンドバットという商人の荷物でしたがね。そ



の男はかわいそうに、海におぼれて死んでしまいましたよ。
と、へいきで答えるのです。

「そのシンドバットはここにいます。私はふしぎにも、いのちびろいをして、このとおり、ここではたらいっているのです。」

というど、船長もはじめて気がつき、たいそうおどろいて、
「それこそ、神さまのお助けですよ。さあさあ、あなたの品物をおうけとりください。」

といって、荷物をすっかりわたしてくれました。これを聞いて、船にいた商人たちも、大よろこびで、ひとりのこらず、私のまわりに集まってきました。そこで私は荷物の中から、



いちばんめずらしい品を王さまにさしあげますと、王さまもたいそうおよろこびになり、おかえしとして、たくさんのおからもをくださいました。私は自分の品物をみんな売って、その島の産物をたくさん買い入れ、ふたたび船に乗って、バクダットのみやこへ帰ってきたのでありますが、おかげで大商人になることができました。

八 雪国のおたより

ラジオがかりのさぶろうさんとよし子さんは、かくせいきをテーブルの上ののせて、スイッチを入れました。

みんなは、学校放送の、「雪国のおたより」をしずかに待っています。

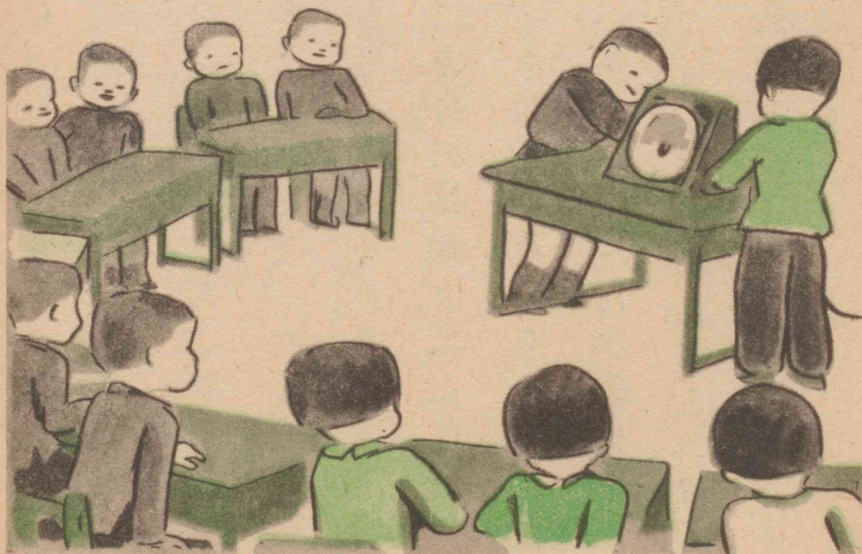
やがて、いつもの音楽につづ

いて、アナウンサーの声がしました。

アナウンサー 「みなさん、寒さに負けないでお元気でしようね。きょうは、北の国のお友だちから、雪国のおたよりをお送りします。」

——ふぶきの音——

男子の「みなさん、ただ今から、雪国のお話をいたしましょう。」
女子の「今、私たちのいる教室の外は、はげしいふぶきになっています。ですから、教室の中はタぐれのようになっています。」





子女一の「ゴーツとふぶきがやってくると、

目の前はなんにも見えなくなり
ます。顔に雪がふきつけるので、
いきもできないほどです。そん
な時も、マントにしっかりくる
まって、うしろむきになって、
じつどがまんをします。はげし

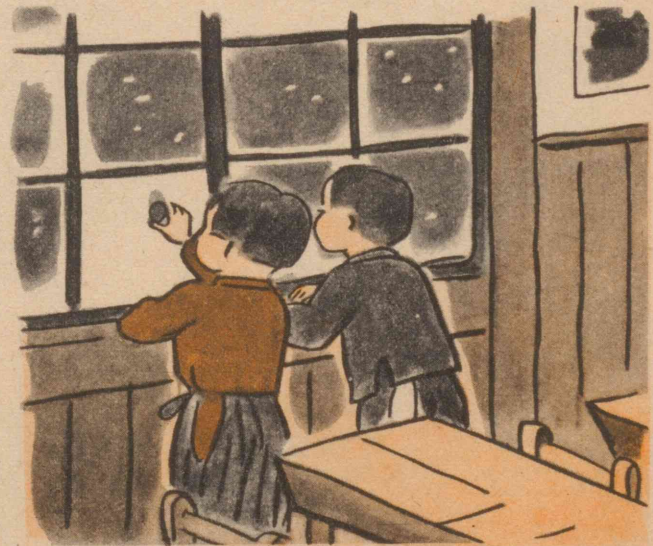
子女二の「ニツケルのお金をあ

たためてガラスにあ
てると、そこだけと
けて、まるい小さな
雪の、のぞきめがね
ができます。」

子男一の「ぼくたちは、その小

さいのぞきめがねか
ら外をながめます。」

子女一の「けれど、そののぞきめがねも、ふきつける雪のため
に、すぐ見えなくなってしまいます。」



いふぶきが通りすぎると、またあるきだします。」

子男 一の「毎日、毎日の雪で、道も畑もくべつがつかなくなり
ます。」

子女 二の「そのために、道にささの葉などを立てて、道しるべ
にしたりします。」

子男 二の「この間、こんなことがあ
りました。」

ぼくたち十人ばかりは、
ふぶきの中を助けあって、
学校へ行くどちゆうでし
た。ぼくたちは、ぼくの



にいさんを先頭にして、
汽車ごっこのようになら
んで、道しるべのささの
葉をたよりにあるきまし
た。」

子女 三の「私もその中にいました。」

子男 三の「ぼくは先頭のつきにいま
した。」



はげしいふぶきの音——

子男 二の「はげしいふぶきが、どつどふきつけました。あたり

はなんにも見えませ
ん。あっと思う間に、
ぼくは深いくぼ地に
落ちこみました。つ
づいて、ぼくよりあ
との五人が、一かた
まりになって落ちて
きました。」



子女三の「私もそのひとりでした。私たちは、はい出そうも
がきました。けれど、その深さは二メートルもある
ので、どうすることもできません。」

子男二の「一年生や二年生がなき出したので、ぼくたちまでな
き出しそうになりました。」

子女三の「私たちは、声をかぎりに助けをもとめました。私
たちの声はふぶきにけされてしまうためか、だれも
助けにきてくれません。」

子男二の「ぼくたちも、もう力がなくなって、だきあってない
てしまいました。」

子男三の「ぼくたち先頭のは、ふと気がついて、ふりかえっ
てみると、今までいたはずの、うしろの六人がいま
せん。びっくりしてあたりをさがしましたが、やっ
ぱり見つかりません。」

いそいで学校へかけ
つけて、先生に知ら
せました。さあ、た
いへんです。大き
ぎです。そこで、先
生や小使さんたちが、
大ぜいで助けに行き
ました。」

子女三の「間もなく、私たちは

ひとりのこらず、ぶじに助けられました。」

子男二の「もし、あの時、ぼくらがみんないっしょに落ちてい

たら、どうなっていたでしょう。」

子女三の「その深いあなは、あんきよといって、畑の水はけを
よくするためにはった深いあなで、ふつうは、土か
んをおして、その上に土をかぶせるのです。それ
が、できあがらないうちに冬になり、雪がふり出し
たので、そのままにすててあったのです。」

子男一の「こんなことはめったにありませんが、ふぶきの中を
ゆききするのは、なかなかくるしいことです。バス
などもたいへんです。バスの屋根の上には、たくさ
ん雪がつもって、まるで雪だるまがあるいているよ
うです。今にもとまりそうに、のそりのそりである

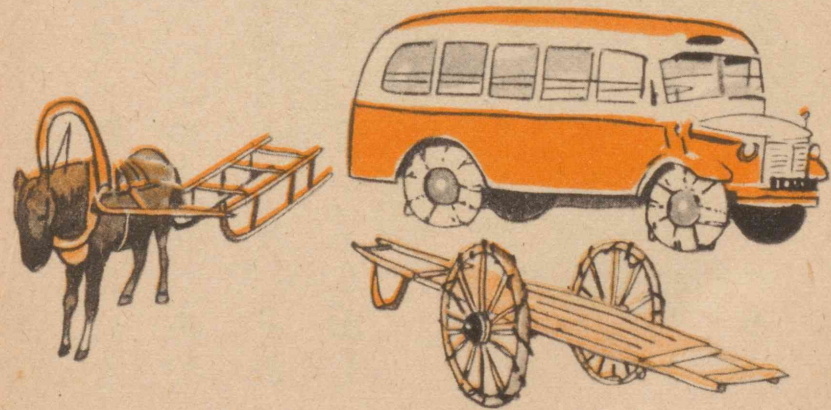


いているのは、かわいそうな
気がします。」

子女一の「バスの車には、くさりがまき
つけてあります。それはこおっ
た雪の上を通ると、すべって
きけんだからです。」

子男二の「荷車にも、車にくさをまき
つけます。」

子女二の「けれども、雪が深くなると、
たいていは馬そりをつかいま
す。そりを馬がひくのです。」



子男三の「雪のふらない日、そりの通ったあとには、つるつるに
こおりついて、月夜などは、それがかがみのように
光ります。」

子女三の「その上を私たちがあらくので、ちよつとでもわき見
をしたら、すべって、すってんころりんところびます。」
子男一の「けれど、ぼくらは冬はつらいとは思いません。あた
たかい所に住む人にはわからない楽しさも、たくさ
んあります。」

子男二の「その一つは、スキーです。」

子男三の「それから、スケート。」

子女一の「かまくら遊びも、私たちには楽しい遊びです。」

子女二の「かまくら遊びという

のは、つもった雪の中を深くほりこんで、大きな雪のあなを作り、その中で遊ぶのです。」

子男一の「お正月には、かまく

らのあなの中に、ろうそくをともし、そこでぼくたちは、みかんやおもちなどを食べて遊びます。」



子女三の「私たちは、かまくらの中で、いつもこんな歌をうたいます。」

—— みんなでうたう ——

上を見たら虫こ。
中見たらわたこ。
下見たら雪こ。

子女二の「ことしのお正月には、かまくらの中で、うさぎになって、おしぱいをしました。ほんとうにうさぎにでもなったような気がして、とてもおもしろく思いました。」

子男二の 「冬は楽しいけれど、春がくるうれしきは、雪国のも
のでなければわからないでしょう。」

子女三の 「雪がとけはじめ、学校の運動場の土が見え出すと、
気持がはればれとしてきます。私たちはこんな歌を
うたいます。」

——みんなうたう——

雪、雪、とけたよ、あるこよ、ラララ。
土、土、見えたよ、それふめ、ラララ。
のぞくよ、草の芽、青い芽、ラララ。
お手々をつないで、土ふも、ラララ。

子男三の 「春がきて、おひがんのおわりの日には、ぼくたちは
きえのこった雪をふんで、近くの山にのぼり、わら
を山のようにつまかさねてもやします。これを送り
火といひます。この時は、おうちの人たちもまじっ
て歌をうたいます。」

子女三の 「この歌は、おひがんのほどけさまをお送りする歌で
すが、長い冬にさよならをする歌でもあります。」

——みんなうたう——

野火の火もついたよ。

かどの火もついたよ。
じいさんよ、ばあさんよ。
あかりにおだんごしよってね、
しずかに帰ってお行きよね。
しずかに帰ってお行きよね。

——ふぶきの音——

アサウ
ンサー
「これで、北の国のお友だちからの、雪国のおたより
をおわります。みなさん、さようなら。」

九 どこかで春が

(一) もしも春がこなかったら

もしも春がこなかったら、
みんなはだれにキツトどなるだろ。
——ぐずぐずしないで春よこい。

もしも春がこなかったら、
麦や菜っぱはかれるだろ。

——早くきてくれ、春よ春。

もしも春がこなかったら、

その時、はっきり、わかるだろ。

——春がどんなにだいじだか。

もしも春がこなかったら、

だれかはきつとなくんだろ。

——ああ、しもやけがいたいんだよ。



もしも春がこなかったら、

こよみはひつじに食べさせよう。

——そしたららおこつてくるかしら。

(二) 原っぱ

めじろがきている原っぱ、

日があたたかになってっている山の原っぱ、

ふきの芽がのび、かれ草が光り、

ほうい、ほういとよぶ原っぱ。

ぼくたちがじんとりする原っぱ、
さんしゅゆのさいてる原っぱ、
だれもかれもうれしい原っぱ、
「行くぞ、ほら。」 「行くぞ、ほら。」
よんでる原っぱ。

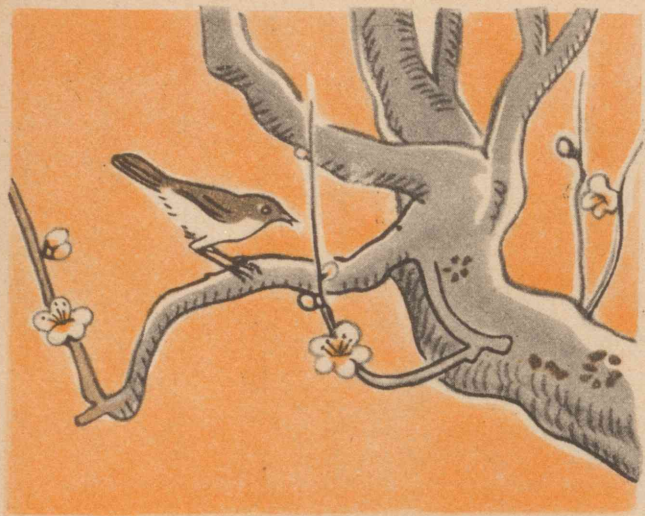
風がきている原っぱ、
きのうさるがとれたといってる
原っぱ、
山はまだ雪なんだな。
ここだけに春がきている原っぱ。



日のあたってるとる原っぱ、
風があそんでる原っぱ、
めじろがないてる原っぱ、
ぼくたちのよく行く山の原っぱ。

(三) どこかで春が

どこかで春が
生まれてる。
どこかで水が
ながれ出す。



十 小鳥のうた声

ながい冬もおわって、春がもう
 すぐやってきます。
 庭のうめの木で、うぐいすが、
 ほがらかな声で春のくるのを知ら
 せ、やがて野原の空で、ひばりが
 はねをちぎれるほどふりながら、
 楽しそうにうたいまわるでしょう。
 みなさんは、気をつけて、小鳥

どこかでひばりが
 ないている。
 どこかで芽の出る
 音がする。

山の三月
 こちふいて、
 どこかで、春が
 生まれてる。



のなき声を聞いたことがありますか。

さあ、しよじをあけて、屋根のすずめはなんと鳴いて
いるか、よく聞いてみましょう。

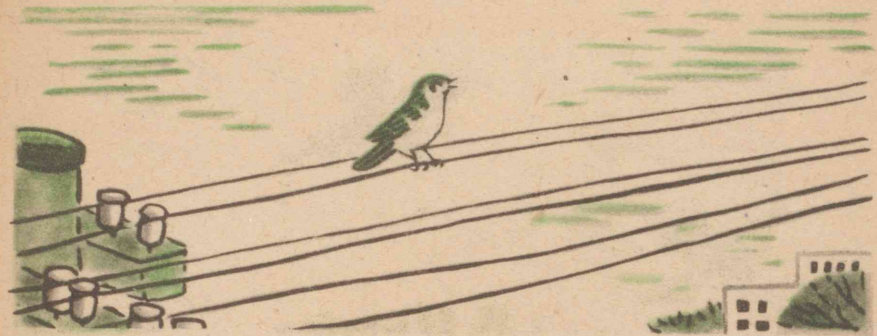
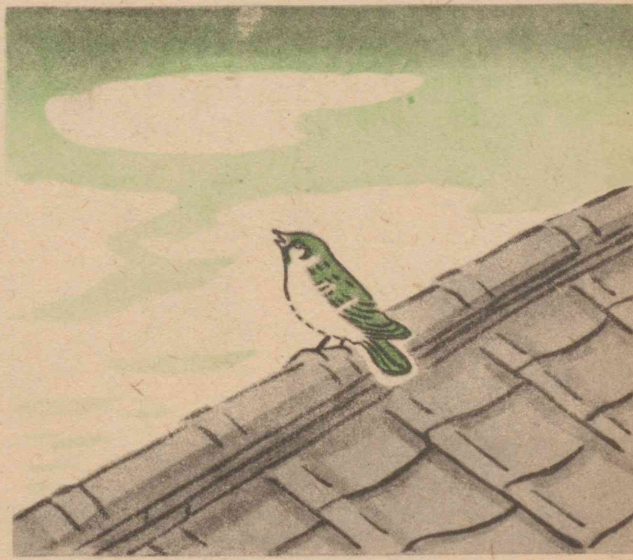
チュイーン チュツチ

チーム チュン、

チュイーン チュツチ

チーム チュン……。

耳をすまして聞いてみると、こんないい声で鳴いています。
これは、楽しくてうかれている声です。



むこうの電線にとまっているすずめは、
なんといつているでしょう。

チュエツ チュン、チュエツ チュン、

チュエツ、チュン。

これも楽しそうな声です。けれど、この
すずめは、前のよりへたです。チュエツとチュ
ンと、二つしかことばを持っていないで、
それをくりかえしているだけです。

町のすずめは、七つも八つもことばを持っ
ていることがあります。いなかのすずめ
や子すずめは、二つ三つぐらいしか持って



いません。

みなさんの近所にいるすずめは、どうでしょう。よく聞いて、くらべてみましょう。

チュツ チュツ チュツ チュツ……。

あ、どこかですずめが、わるものに追われていきます。もずです。もずに追われているのです。

ジュク ジュク ジュク……。

ほら、助けてくれとよんでいます。

キイ キイ キイ、キリキリキリキリ

……。

もずが鳴いています。

すずめをいじめたもずでしよう。けやきの木のとっぺんで、おをくるくるまわしながら、くやしそくに鳴いています。

今度は、もずの声を聞いてみましょう。

キュー キュー キュー キチキチキチキチ……。

おや、キチキチという時は、くちばしをあけたままで声を出しています。



キイツ キイツ、ヒツ ヒツ ヒツ……。

あ、ひたきの鳴きまねをはじめました。

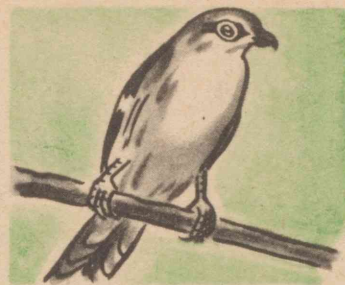
チュピ チュピ チュピ……。

さあ、今度はなんのまねでしょう。

チチピー チチピー チチピー……。

ああ、わかりました。しじゅうからの鳴きまねをしています。

もずは、よくほかの小鳥のなきまねをします。すずめの声、のどかなうぐいすの声、にぎやかなよしきりの声など、とてもうまくまねます。もずがなぜ鳴きまねをするのか、考えてみましょう。

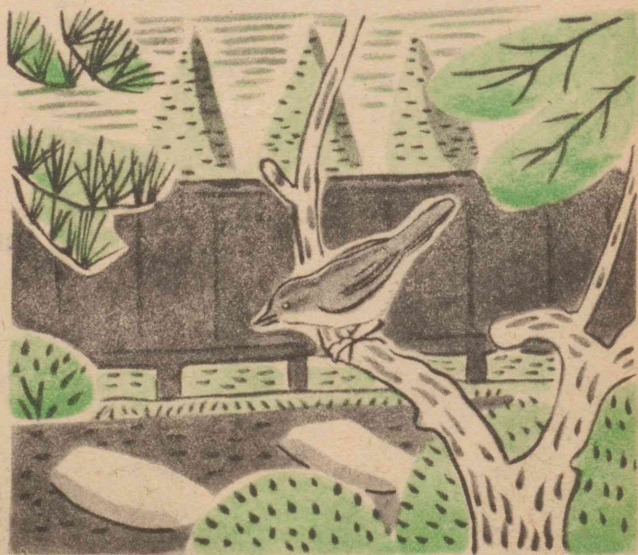


うぐいすといえは、ついこの間まで、うらの庭のうえこみの中で、

チャツ チャツ チャツ

……。

と、じみな声で鳴いていました。が、けさ、はじめてさえずりを聞かせてくれました。さえずりはじめなので、あまりじょうずではありませんが、ホーホケキョという声を聞くと、もう春がきたような心持がします。じょうずなうぐいすは、



ヒヒー ホケツ キョ

ホー ホケツ キョ

ホホホホー ケツ キョ。

と、三つのふしの歌をうたい、はじめのふしは高いちょうしで、おわりのは、ひくく鳴きます。また、なにかにおどろいた時には、

ケケツキ ケケツキ ケケツキョ…

と、せわしそくに鳴きます。これは、たいてい、とびながら鳴くので、うぐいす

の「谷わたり」といわれます。

土地土地によって、人間のことばになまりがあるように、小鳥の鳴き声にも、よくそういふのがあります。うぐいすのお国なまりを教えますから、ハイキングにでも行った時、よ

く聞きくらべてごらん下さい。

京都の大文字山という山のうぐいすは、たいてい、ホーホケケキョと鳴いていますが、同じ京都でも、ひえい山では、ホーホキイコホイと鳴くのがたくさんあります。また、ひだの山おくて聞いたのは、ヒ



ホケチヨ　ホケチヨ、しんしゅうでは、ホー　ホケキヨンと
いうのでした。ちばのいなかで聞いたのは、もっともへたな
うぐいすたちで、ホー　ホキヨ　ホー　ホキヨと鳴いていま
した。

こういうように、いろいろの地方で、かわった鳴き方をす
るのは、どういうわけでしょうか。それは、子ども鳥が親鳥
たちの鳴き声を聞きならって鳴くからです。

さあ、今度は、森の方に足を運びましょう。

ほおじろが鳴いています。まつのこずえで、くり色のむね
をボールのようにふくらませながら――。

お聞きなさい、すずをふる

ようなさわやかな声です。

リイツ　ピー　チリヨ

チ、

リイツ　ピー　チリヨ

チチリ。

おや、一ことめと二ことめ

と、ちよつとちがいます。

リイツ　ピー　チリヨ

チ、

リイツ　ピー　チリヨ　チチリ、



リイツ ピー チリヨ チチリ、チヨ。
 リイツ ピー チリヨ チ、
 リイツ ピー チリヨ チチリ、
 リイツ ピー チリヨ チチリ、チヨ。
 わかりました。ことばのおわりが、一ことめより二ことめ、
 二ことめより三ことめと、だんだんこみいってくるのです。
 そして、ひととおりのうたいおわると、またはじめから、やり
 なおすのです。ほおじろは、こうして声をよくしようとして
 いるのです。

今度は、麦畑の方へ行ってみましょう。
 ひばりがいます。

ビリユー ビリユー、
 ビリユー ビリユー。

なにか話しあいながら、ひくくと
 んでいます。おどろかさないうように、
 しずかにして、さえずるのを待ちま
 しょう。

チーチブ チーチブ、
 チーチブ チーチブ。

ほら、さえずりはじめました。こ
 れは空へあがる時の歌です。まっす



ぐにあがっていきます。

チュクビービー チュクビービー チュクビービー。
わをかいてまわりながら、鳴きはじめました。

チーチーチュク、チーチーチュク、チーチーチュク、
チュビチュビチュビ。

チールールー チールールー チールールー。

さかんに鳴いています。なんといううらかな気分でしょう。

フィーチチ フィーチチ フィーチチ チカチカチカ。

ほら、せきれいの鳴きまねをはじめました。

チツピーチチ チツピーチチ チツピーチチ。

とんでいるのが見えますか。あんなに空高くあがって、むちゅうになってうたっています。

リユリユリユ リユリユリユ……。

さあ、もうおります。あ、あそこへおりました。

はじめのチーチブ、チーチブというのは、あがる時に鳴く声で、リユリユリユはおりる時です。そして、その間の声は、空をまいながら鳴くうかれ歌で、いろいろな鳴き声かわるがわるうたいつづけます。

声のよいひばりは、十いくつものもんくを持っていて、これをくりかえしくりかえし、休む間もなくうたいます。しまいには、自分の鳴き声だけではた然なくなり、ほかの鳥の声までとり入れて、歌をにぎやかにするので。このことを、ひばりの「ひろいこみ」といっています。

小鳥の鳴き声は、よく聞いてみると、たいへんおもしろい
ものです。はじめのうちには、ちよつとむずかしいようですが、
少しなれると、みなさんのようなよい耳には、わけなく聞き
とることができるようになります。

小鳥の鳴き声を聞きながら、その小鳥のようすをかんさつ
していると、鳴き声のたいのいみがわかるようになりま
す。そうになったら、すてきではありませんか。



おけいこの手びき

一 山のぼり

(1) 道がだんだんけわしくなってきた時、み
んなは、なにはげまされて、のぼって行
きましたか。

(2) 見はらしたいからは、どんなものが見え
たでしょう。

(3) この文を読んで、おもしろいと思ったこ
とを、ノートに書きぬきましょう。

二 キャッチボール

(1) 三つの詩を、ゆつくりくりかえして読み
ましょう。

(2) 一つ一つの詩について、感じたことを書
いてみましょう。

(3) 詩によくあうような読み方をくふうして

みんなの前で読んでみましょう。

三 二十のどびら

(1) この二十のどびらのようなあそびを、書
いてみましょう。

(2) ことばづかいは、子どもとおとな、女と
男というように、いろいろちがっていま
す。気づいたことを書いてみましょう。

(3) 子どものことばにも、ていねいなことば
と、らんぼうなことばがあります。おなじこ
とを、二とおりにわけて書いてみましょう。

四 発表会

(1) 「秋の七草」の発表をどう思いますか。
秋の七草をよく見て、発表しましょう。

(2) 「ぼくのすきな発明王」について、どん

な感じがしましたか。

- (3) 自分でしらべたことを、発表することはたのしいものです。聞く人に、よくわかるような発表のけいこをしましょう。

五 学級新聞から

- (1) これは、なんとなどのニュースですか。みじかくまとめて書きましょう。
- (2) 私たちも学級新聞を出しましょう。どんな新聞にしましょうか。役わりをきめて、作ってみましょう。

六 まさつ電気

- (1) 文を読んでつぎの問題に答えましょう。まさつ電気はどうしておこりますか。じっけんの時、まんねんひつや、くしや新聞紙をかわかしたのはなぜでしょう。たばこのこなの字は、どうして書けたので

このお話を紙しばいにしましょう。

八 雪国のおたより

- (1) この文は放送台本といって、ラジオで放送する時のすじがきてす。ふつうの文とちがうところをしらべましょう。
- (2) ふぶきの音やうた声をどんな所に入れてありますか。どのように書いてありますか。
- (3) この台本によって、じつさいに放送するけいこをしてみましょう。
- (4) 雪国の子どもの生かつと、あなたがたの生かつとはどうちがいますか。あなたの国のおたよりをする台本を作ってみましょう。

九 どこかで春が

- (1) くぎりに気をつけて、この詩をしずかに読みましょう。
- (2) どんなことをうたったのか、一つ一つの

しょう。

どうしたら、アイスクレーキを作ることができそうですか。

- (2) 私たちも、まさつ電気をおこしたり、アイスクレーキを作ったりしてみましょう。

七 冬の夜ばなし

- (1) 「みかん」をなんべんも読んでからつぎのしごとをしましょう。
- お話のすじをみじかくまとめて書く。
- このお話を読んで感じたことを書く。
- お話をおぼえて、みんなに聞かせる。
- (2) 「シンドバットのぼうけん」をなんべんも読んでから、つぎのしごとをしましょう。
- このお話をいくつかにわけるとしたら、どこできいたらよいでしょう。

詩について考えてみましょう。

十 小鳥のうた声

- (3) さしえを入れて、この詩を書きましょう。
- (1) 小鳥の声は小鳥のことばです。すらすらと読めるようにけいこしましょう。
- (2) 文に出てくる小鳥の名と、なき声を書き出して、小鳥のなき声を表に作りましょう。
- (3) つぎの問題に答えなさい。
- かん字にかなをつけましょう。
- さあ、今度は森の方に足を運びましょう。
- 心持 土地 野原 屋根 近所
- つぎのことばをつかって文を作りましょう。
- ほがらか ついこの間 うららか
- の所へ字を入れて正しい文にしましょう。
- ながい冬も□□□□、春がもう□□やっつきます。



新しく出たおもなことば

秋草	6
あたため(て)	36
あぶら絵	14
あわれに	88
いずみ	86
一生	42
いみ	130
いんさつき	40
うかん(た)	84
うちこむ	29
馬そり	102
うららかな	128
大さわぎ	100
お国なまり	123

おしばい	105
おそろしさ	75
おひがみ	107
おみなえし	8
おんど	9
海岸	87
かがく	40
学問	37
火事	40
学級新聞	45
かれ草	111
かわかす	54
かんけい	23
かんだん計	62

きまつたえ(た)	29
空気	6
くさり	102
くだ	59
くぼ地	98
けいじばん	48
見学	82
けんきゆう	40
航海	82
心ぼそい	85
こずえ	124
こよみ	111
さきみだれ(て)	32
産物	91

しお	59
しけんかん	59
じっけん	40
しつもん	25
しもやけ	110
じゅんれいすがた	68
じょうき船	20
商人	82
しんし	41
スキー	103
すばらしく	40
せわし(そうに)	122
せんめんき	59
外がわ	64

そり	102
台所	60
谷わたり	123
たより	97
ちくおんき	43
地方	81
ちょう上	9
月夜	20
出はずれ	67
天国	82
土かん	101
読書	31
どろぼう	41
なだらか(てした)	8
なてしこ	33
荷車	102

にげおくれ(た)	84
主	89
年がじょう	52
野ぎく	8
のどかな	120
ハイキング	123
はげまし(て)	11
発行	38
発表会	31
はんじょうし(ました)	39
びしゃりと	40
ひたき	120
ひょうばん	40
吹きつける	94
ふぶき	93
ふみはずし(て)	46

文明	43
へた(てす)	117
ペンじく	53
ほがらかな	115
ほそ長く	34
まごつき(ました)	70
まぜしい	67
まよっ(て)	68
みすぼらしい	67
道しるべ	96
むたづかい	39
村人	79
め馬	87
めつたに	18
もうけ(て)	38
もどめ(ました)	99

山のぼり	4
やりなおす	126
夕ぐれ	93
雪ぐつ	95
世	43
よごさ(ない)	46
夜ばなし	67
よびかけ(ました)	4
ラジオがかり	92
りょうり	83
列車	38
ろうか	47
ローラースケート	43
わかれ(て)	34
わらい声	26
わらじ	75

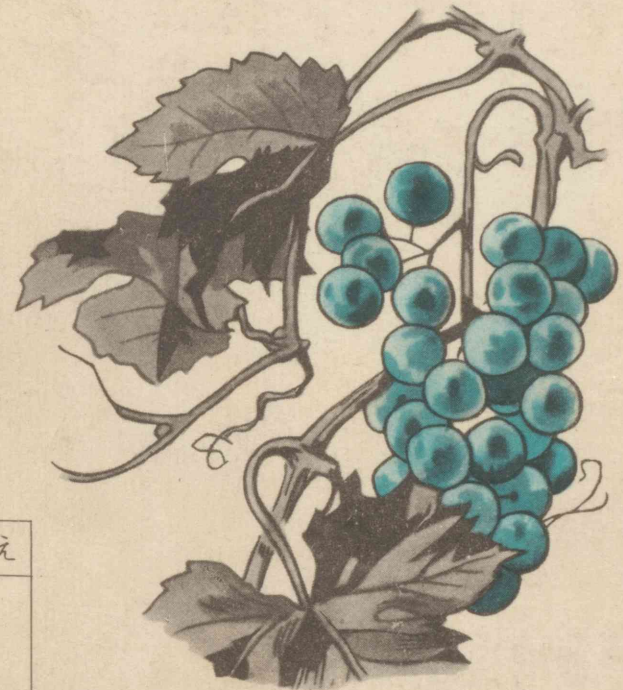
都	深	航	寒	私	勉	明	岸	等
(123)	(98)	(82)	(67)	(46)	(39)	(31)	(20)	(5)
親	使	荷	住	助	強	王	問	野
(124)	(100)	(88)	(67)	(47)	(39)	(31)	(22)	(8)
遊	品	店	死	不	間	題	遠	
(104)	(89)	(71)	(47)	(43)	(33)	(22)	(11)	
芽	神	横	度	由	根	物	宮	
(106)	(90)	(72)	(53)	(43)	(34)	(22)	(14)	
菜	産	同	回	計	昭	部	指	
(109)	(91)	(74)	(56)	(44)	(36)	(23)	(15)	
庭	放	里	正	級	和	首	役	
(115)	(92)	(74)	(57)	(45)	(36)	(24)	(15)	
鳴	送	橋	氷	新	売	答	感	
(116)	(92)	(74)	(58)	(45)	(38)	(25)	(17)	
線	楽	美	台	聞	列	申	西	
(117)	(92)	(79)	(60)	(45)	(38)	(28)	(18)	
追	顔	商	所	休	今	会	馬	
(118)	(95)	(82)	(60)	(46)	(38)	(31)	(19)	

編修委員

日本女子大学付属 豊明小学校主事 東京芸大学竹早 付属小学校教諭	同	成蹊中学校教諭	日本女子大学付属 豊明小学校教諭	作家	さし絵・表紙	新井五郎	高橋庸男	箱崎正秋
西原慶一	山下正雄	飛田多喜雄	小山立夫	齋田喬		井口文秀	竹原聖千	藤沢龍雄
	泉節二					田中良	野水昌子	耳野卯三郎

Approved by Ministry of Education (Date Oct. 26, 1950)

発行所	12	小国312	昭和二十六年五月十日印刷 昭和二十六年五月十五日発行 (昭和二十五年八月十二日文部省検定済)	国語の本六(小学校第三学年後期用)
	二葉			
発行所	東京都北区稲付町一丁目二〇八番地	代表者	西原慶一	定価 円 銭
	二葉株式会社	代表者	大野治輔	
印刷者	東京都北区稲付町一丁目二〇八番地	代表者	大野治輔	
印刷者	二葉株式会社	代表者	大野治輔	



なまえ

広島大学図書

0130449919



二葉株式会社

庫

0

19